

個が生きる社会科授業と評価

—— 自己評価力の育成をめざした試み ——

上之園 強

1. 個が生きる授業と自己評価力

社会科における個が生きる授業を以下のようにとらえている。

「児童が意欲的に社会事象に取り組み、それぞれの見方や考え方に基づいて自分なりの方法で追求し、より深い見方や考え方を児童自身が培っていく授業」

このように児童自身が主体的に取り組み、自分らしさを発揮して、より深まる授業を「個が生きる授業」ととらえているが、その基盤をなすものは、児童一人一人の学習に対する意欲であるととらえている。それは、自ら学ぼうとする意欲があつてこそ、自分らしい学習ができ、より確かな見方や考え方を培うことができると考えているからである。従つて、個が生きる授業づくりにあつては、まず児童の学習への意欲を引き出すことが必要とされる。

また、その意欲に支えられて学習した成果を、児童自身が自覚することによって、学び得たことの満足感を持ち、新たな学習意欲が生まれてくると考えている。従つて、個が生きる授業づくりにあつては、児童自身が「自分自身の現状を自覚してよりよい方向に進んでいく力」、言いかえれば「自分自身の現状を冷静に評価していく力」を培っていくことが大切である。このように、自分自身の現状を冷静に評価し、自分自身でよりよく進んでいこうとする力を培っていくことによって、最終的には「自立した学習」のできる児童を育てていけると考えている。

上記のことをふまえ、個が生きる授業づくりにあつては、下記の二つの視点から授業づくりのありかたをさぐっているが、ここでは自己評価力の育成の視点に焦点をあてて述べていく。

①自ら学ぶ意欲・態度の喚起と持続の視点から。

②自己評価力の育成の視点から

2. 自己評価力の育成にあつて

児童はそれぞれに意欲を持った伸びようとする存在であるという前提にたつて、自己評価力を次のようにとらえている。

「自分自身の力を正しくとらえ、誤りや不備を修正したりよさを認め、よりよく伸ばして行く力」
この自己評価力は、一人よがりではなく、他者からの評価、つまり友人や教師からの評価も取り込んで最終的には自分自身を伸ばして行く力であるととらえている。

自己評価力を育成していくためには、児童みずから自分自身を評価していける場面を学習の中に設定し、繰り返しの中で育てていくことが大切であると考えている。

そのためには、まず、課題に対して「自分自身の考え」を持ち、その変容を自分自身で自覚していくことが求められる。したがつて、自己評価力の育成にあつては、児童自ら学ぶ意欲的な追求過程を基盤にすえて、そのなかで特に、課題に対する「自分自身の考え（予想）を持つ場」を重視する。次に、追求過程では「その変容に自分自身で気づいたり、あるいは他との関わりの中で気づいたりできる展開」を工夫していく。そして、「学習をふりかえる場」を単元の中に適時適切に位置づけ、自分自身の考えの変容をとらえたり、追求方法の検討をおこなわせていく。

以上の考え方にもとづいて、本実践の仮説（取り組みの重点）を次のように設定した。

仮説 1

課題に対する予想の場を重視し、一人ひとりが自分の予想（考え）を持つならば、児童はその予想をにそって追求し、修正、付加しながら深めていくのではないか。

仮説 2

学習をふりかえる場を重視し、一人ひとりが学習成果を自分の予想と比べるならば、児童は自分なりの深まりを自覚し、満足感に基づいて次への方向性をみだしていくのではないか。

自ら学ぶ意欲、態度を育てる学習の構造（1時間および1単元）

（資1）

学 習 過 程		児童の意欲や活動	教師の留意すること
課 題 把 握	課題の把握	（社会事象との出会い） ・驚き，矛盾，とまどい ・知的葛藤，知的好奇心 ●自分なりのめあての設定	（教材の開発，提示の工夫） ・ほどよい抵抗感のある教材 ・具体的で心情のゆれをひきおこす ・主体的追求に向かえるもの
	自分の予想		
追 求	↓	（自己に挑戦） ・試行錯誤 ●自分なりの考えの深まり	（自力解決させる工夫） ・時間の保障 ・調べ方の示唆 ・試行錯誤の容認
	ひとり学習		
ま と め	全員学習	（確かさへの追求） ●他への共感，受容，批正 ●学習内容の深化，修正 ・自己表現	（集団で思考し深める工夫） ・深化，拡散をうながす発問 ・子どもの調べ学習を生かす展開 ・自己表現をうながす姿勢づくり
	↓		
ま と め	まとめ	（成果の確認） ●内容の深まり，広がり ●学習方法の吟味 ●満足感，達成感 ●新たな追求意欲	（個に応じた評価の工夫） ・学習意欲，学習方法，取り組への着目 ・学習内容の変容への着目 ・他者からの承認の位置づけ
	評価展開		

●印の意識を児童自身が自覚できるような場作りをしていくことが自己評価力の育成につながると思っている。

3. 自己評価力の育成に視点をあてた実践 第6学年小単元「官営工場」

(1) ねらい

明治政府は、外国におとらない豊かで強い国をめざして、製糸工場などの官営工場をつくったことを理解させる。

(2) 展開の大筋・・・資料2

(3) 展開の実際

「課題に対して自分の予想を持つ場」

「富岡製糸場」の絵を提示し、児童から素朴な気づきを引き出した後に、江戸時代の「手工業による織物工場」の絵と比較させて、富岡製糸場の特徴を次のようにとらえさせた。

展開の大筋 ()は時間

過程	主な学習内容と活動	児童の意識	指導上の留意点
課題の把握↓ 課題への予想を持つ↓ 予想にそって追求する↓ 成果をまとめる	1 明治政府が官営工場をつくったことを知る。 ・全国13箇の官営工場 ・紡績 製糸 造船 ・外国をまねた工場	・江戸時代と違い、機械を使った工場だな ↓ ・ どうして、こんな工場をつくったのだろう。	○ 官営工場の様子をとらえやすくするために以下の点に留意する。 ・富岡の製糸工場の絵を提示し、児童の素朴な気づきを引き出す。 ・江戸時代と比較して、その特徴(機械化、外国制)をおさえる。
	2 明治政府が官営工場をつくったのはどうしてか予想する。(1) ①一人ひとりが予想する ・産業をおこすため ・外国に劣らないため ・便利で豊かな国づくりをめざして ②一人ひとりの予想を出し合い吟味する。	・工場をつくったのは、○○ではないか ↓ ・○○の考えもあるのか、なるほど ・○○の考えはおかしいのではないか	○ 官営工場について、つくった目的を予想する場を設ける。その際一人一人が自分の予想を持てるように次の点に留意する。 ・時間を十分にとり、一人ひとりの考えを引き出す。 ・自分の考えをノート書く場を設定し整理させる。 ・予想については、まず自由に発表させ、次に互いの予想について、吟味しあう場を設定する。
	3 明治政府が官営工場をつくったのはどうしてか予想にそって追求する(1) ①一人ひとりが予想にそって追求する ・外国におとらない豊かで強い国づくりをめざして ・財源を安定させて産業をおこす。 ②調べたことを出し合いみんなで、それぞれの予想を検証する。	・○○の資料で調べてみるぞ ↓ ・わかってきたぞ、予想があっているぞ ・予想と違うぞ ↓ ・なるほどそうこともあるのか ・よくわかってきたぞ	○ 官営工場をつくった目的について次の手順でとらえさせていく。 ・児童ひとりひとりが確かめる資料を見つける。 ・児童の見つけた資料を基盤にして全員でそれぞれの予想を確かめる ・当時の米欧の様子や大久保の手紙で補足する。 ○ 追求の足跡が残るようにノート記述の基本的な約束を以下のようにする。 ・課題と自分の予想 ・調べたことと根拠となる資料 ・学習成果に対する自分の感想の記述
	4 明治政府が官営工場をつくったのはどうしてかについてまとめ、自分の予想と比べる。(1) ・豊かで強い国作りのための諸政策 ・各自の内容の変容の認識	・自分はこんな考え方をしていたんだな ・自分は、これだけ深まったんだな	○ ふりかえる学習については十分に時間をとり、変容を自覚させる。

- ・政府がつくった官営工場
- ・外国の新しい技術を取り入れた機械
- ・外国から招いた技師

児童が江戸時代とは異なる近代的な工場の特徴をとらえたところで、このような特徴をもつ紡績、製糸、造船などの官営工場を全国13カ所に設置したことを説明した。そして、次のような発問をおこない児童の考え(予想)を引き出してみた。「新しい政府がこのよう特徴をもつ官営工場をつくったのはどうしてでしょう。」児童の予想を引き出すにあたっては、考える時間を十分にとり、ノートに記述させてみた。そして、一人ひとりが自分なりの予想を持った段階で出し合ってみた。以下はそのおもなものである。

- (ア) 日本の工業は遅れているので、早く外国に追いつきたいから。
- ・外国から買うのではなく、自分の国でつくりだせるようになりたいため。
 - ・鎖国の間に、外国と比べていろいろな産業に大きな差ができたので。
- (イ) 外国に負けないくらいの強い国になりたいため、産業をおこしたいから。
- ・ペリーが浦賀にやってきた時に、軍事の力の差を感じてくやしかったから
 - ・次は条約で不利になりたくないから
 - ・外国が攻めてきたときにそなえて、
- (ウ) 五か条の御誓文にあるように、国をさかえさせるため。

(エ) 明治時代になって、お金の余裕ができて豊かになったからつくることができた。

児童が予想を発表し終えたところで、それぞれの予想が正しいかどうか互いに吟味しあうことにした。その結果ア、イ、ウの目的については、全員の賛成を得られたが(エ)のつくることのできた条件については、賛成7人、反対28人で意見が分かれた。賛成の考えは「お金の余裕がなければこんな近代的な工場は作れない」というものであり、反対の考えは「豊かになりたいからこそ無理してつくる」というものであった。どちらも根拠がはっきりしないため、追求の場では、工場をつくる財源についても明らかにしていくことを確認して学習をすすめた。

「自分の予想にそって追求する場」

①児童一人ひとりが自分の予想にそって追求する場

自分の予想が正しいかどうか、まずは自分自身で調べることにした。追求にあたっては、事実の羅列をさけて学習に深まりをもたせていくことと学習後に予想を起点として、学習成果がみてとるように記述の方法を以下のように確認した。

- 1 自分の予想を明記する
- 2 根拠となる資料を明記する。
- 3 調べたことは自分なりのまとめ方で記述する。
- 4 わかったことをについて、自分の感想を記述する。

②自分の調べたことをもとにそれぞれの予想を検証する。

集団で予想を確かめていく場合、それ以前のひとり学習で得た資料や考え方を生かしていかななくては、児童の追求意欲や学習の深まりは期待できない。そこで「官営工場をつくったのはどうしてかわかりましたか。自分の予想と比べてどうでしたか」と発問し、児童の学習成果を引き出してみた。児童は「予想とおりだ」「いや少しちがっていた」と言いながら、自分で見つけた資料をもとに官営工場をつくった目的や財源について発表してきた。発表では、児童が互いに調べあっているため、関連した発表や補充する発言は続きより深い事実のとらえをすることができた。

このような段階で、児童の学習成果をより確かなものにしていくために、殖産興業をめざす政府高官の話や日本よりはるかに進んでいる諸外国の様子を写真や文章資料を活用して、補足説明を行っていった。ここでは、「米欧視察中の大久保利通の手紙」と「ニューヨークの高架鉄道の写真」「スウェーデンの製鉄工場」を提示した。

「自分の予想と比較して学習をふりかえる場」

全員で予想を確かめ、官営工場をつくった目的やその財源を明らかにしたところで、学習してわかったことをまとめさせてみた。そして、予想した段階と比べて、自分がどう深まったかを自覚させていくために、「学習してわかったことについて、自分の予想と比べて思うこと(感想)を書き

資料③

～調べてみて～
教科書P11～12

大久保
日本はおくれて
いる。イギリス
はすごい。

富国強兵
日本を強くすること

・「外国に早く追いつくためには、国力を高め近代工業をおこすことが大切」と書いてあり、近代工業をおこすために、大久保利通がイギリスに行き、「イギリスの都市には、必ず工場がある。イギリスが豊かで、強いわけがわかった」と書いてある。
貨幣や銀行の制度を整えた。

資料集P63
・世界の進んだ国に追いつくため
・工場を作るためのお金は、☆地租改正によって入ってきた。

☆地租改正…土地に対する税(地租)の改正をおこなった。

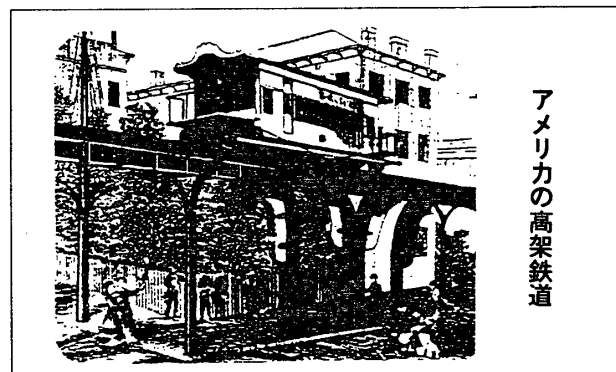
土地

おらの土地からも税をとるのか?
うーん
うーん

地租改正で入ったお金で、官営工場をつくりました。これで外国においつくぞー

こんど地租改正をおこなった。この土地の税をだせ

ハイイ私技師デース年給〇億円デースもうかっているのデースワッハッハー



なさい。」と発問し、ノートにまとめさせてみた。児童は自分のノートを手がかりにしながら学習をふりかき、予想と比べながら感想をまとめた。右の感想はその一例である。

児童が、自分の予想と比べながら学習をふりかき、自分なりの深まり方を自覚していることがうかがえる。そして、そのなかから新たな疑問や見方を持ちつつあることもうかがえる。

4. 考察

本実践は、「児童一人ひとりが自分なりの予想を持つこと」と「ふりかき場での自分の予想と比較して感想を書くこと」を重視した試みであるが、この試みが自己評価力を育成するうえで効果があったのかどうか、児童のアンケート結果とノート記述をもとに考察してみたい。アンケートでは、「〇〇の学習をまた、やりたいですか」と意欲の度合を問いかけることによって、児童がその時どのような意識を持っているのかを探っていきたい。

仮説の(1)「児童一人ひとりに自分なりの予想を持たせることによって、どのような効果があるのか」について

児童一人ひとりが自分なりの予想を持つ場では、まず自分自身で予想し、次にその予想を互いに出しあって、より深い自分の予想をもつという二段階をふんでおこなってみた。この二つの場面に對する児童のアンケートはどちらも35人がまたやりたいと答え、そのその主な理由として次の点をあげている。

思ったこと

ぼくは、予想していたことと同じだったので、やっぱり豊かな国、強い国にしたかったと書いてありました。工業をおこし、しかも、徴兵令までだしてよほど、大久保利通たちが、アメリカ、ヨーロッパを見て回った時に、日本はおくれている、早く世界の国々においつかねばと思ったのだと思います。それと、政府には、お金がなかったので地租改正をして、農民などの人たちの土地から、どんな不作の時でも必ず3%の税をとって、予算を、安定させていると書いてあるのを見て、土地の持ち主は、文句がいたかっただろうなあと思いました。地租改正の文の中に、土地を持っているものが税をおさめると書いてあったので、このころもし、アパートやマンションがあったら、そこに住んでいる人は、税をおさめなくてよくて、その土地の持ち主だけがはらえばいいのだから、少し、持ち主はかわいそうだけどいいなあと思いました。この明治政府の政治の方針を見て来て、このやり方と、江戸幕府の方針をくらべると、明治政治の地租改正と江戸時代の、五公五民どっちがいやかなあと思ったりして、明治政府がおこなった政治は、いいことばかりではないなあと思いました。

<p>資料⑥ 主な理由</p> <p>予想を持つこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えを持つとうれい、やる気のきっかけになる。 ○自分の予想を持っていると調べる時にやる気がでてる。 ○自分の予想を持っていると正しいかどうかしっかり調べていこうとする。 ○自分の予想を持っていると確かめの時、できてできなくともなるほどと思う。 ○最後の学習で振り返る時、最初の自分との違いがわかる。 	<p>資料⑥のア (Tさん)</p> <p>自分で各自考えを持っていないと、授業がおもしろくないし、予想することによって、○意見のだしあい○一人学習○確かめ○感想などの授業にやる気ももていいと思います。予想することによって、その資料を集中して、しっかりと見ようとするし、予想を持つと、あとからのことも感心できる(納得のいくまでしっかりと勉強や一人学習、確かめなどいろいろうちこむことができる)ので、やっぱり予想がないと今の学習方法がひきたたないし、やる気ももてないと思います。予想はやる気をもつためのきっかけになります。</p>
<p>資料⑦ 主な理由</p> <p>予想を出し合うこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ○賛成や反対の予想あり、考えを広げたり変えたりできる。 ○予想について賛成や反対を言い合っているうちに自分に自信がでてくる。 ○予想について賛成や反対を言い合っているうちに「よしやるぞ」という気分なる。 ○友だちの予想を聞いていると、後で調べている時に「ああ〇〇さんの考えが正しいんだ」と思ってわかりやすい。 	<p>資料⑦のア (Hさん)</p> <p>それは、自分の意見があっていたかなとか、自分の意見だけでなく、友達の意見もたくさん聞けるからです。それに、予想をだしあっているうちに、「えっ?」とか、「へえーよく考えたね」などとよく思うからです。また、「それはちがうんじゃないの?」などとすると賛成意見や反対意見がでてきてはく力があつた授業になって楽しいからです。それに言い合っているうちにだんだんわかってくるような気がします。それはというと、自分が予想しているうちに、「これは、どうだったけ?」などのわからない問題がでてきたとき友達の意見を聞くと、「あーそうか。」などという気持ちになれるからです。そういうわけで、みんなと言い合うのはメラメラと「やるぞ!」という気分になられるからです。</p>

この結果から、児童は自分自身の予想を持つことによって、学習の主体者としての自覚を深め、自分自身の考えの正しさを証明しようと学習に意欲的になることがうかがえる。また、調べていく際に、自分の予想を基盤にすえて共感したり、納得したりして、自分の考えを深かめたり、修正していることがうかがえる。仮説の(2)「学習成果と自分の予想とを比べる場を位置づけることによって、どのような効果があるのか」について

「ふりかえて予想と比べる学習」をまたやりたいですかという問いかけに対して33人がやりたいと答え、その主な理由として次の点をあげている。

主な理由

資料⑧

- 自分の予想した考えがあったことがはっきりしてうれしい。
- 間違っていたとしてもそこがきっかけとなって学習したことが深まる。
- 最初の自分の考えとの違いがはっきりとして、学習してわかったことがよりわかりやすくなる。
 - ・印象づけられ、いつのまにか整理される。
 - ・自分の考えの足りなかったところがわかってくる。
 - ・暗記でなく考え方の筋道がはっきりしてくる。
- 学習したことに興味をもちたのしくなる。
- 次の学習のもとになる考えがうまれてくる。
- 学習している時の自分の気持ちがよみがえってくるから。

資料8 (M君)

予想が当たっていても外れていても、とにかく勉強のことが分かるし、自分が調べて分からなかったところを、しらべていてわかったり、みんながどこからそのところがわかったか、教えてくれるので、「ああ、このところからこういうのがわかるのだな。」と自分で足りなかったことがわかるので、こんなじゅ業をもっとやりたいです。

資料8 (Sさん)

感想は私にとってまとめのようなものになっているので、やった方がいいと思います。
次の学習のもとになる考えもうまれるのでいいと思います。(見方をかえて)
それから授業をふりかえり
「あそこがどうだった。」
「自分のまちがいはここ。」
「考えは合っていた。」
などがはっきりしてくるのでいい。

このアンケートの意識と先の児童の感想ノートから、「学習成果を自分の予想と比べる」ことによ

って、児童は成果を得るまでの過程に目が向き、学習を深めていく過程において、自分の予想の正しさを再認識したり、あるいは、その考えの不十分さを修正、補充しながら深めてきたことを自覚していることがうかがえる。また、そのことが自分自身で学習を深めてきたという喜びや楽しさにつながり、学習への新たな意欲や新しい角度からの考え方を生みだしていると考えられる。

あまりやりたくないといった児童の意識は、上記のようなふりかえることの良さを指摘しながらも「自分がすでに知っている内容の場合、予想をするといっても予想が知っていることになり、その予想と比べても自分の深まりがなく、自分の思いがもてない」といったものであった。

このことは、課題を設定する際の提示内容の吟味不足やある事象の背景や意味はすでに知っている(整理されている)事項だけであるという児童自身の考え方によるものと考えられる。したがって今後の改善点としては、児童自身の考えを多様に引き出す課題設定の場の工夫と児童自身が物事を多面的に見ていける姿勢づくりである。

以上のことから「自分自身の力を正しくとらえ、自分自身で誤りや不備を修正したりよさを認めたりして、よりよく伸ばしていく」自己評価力を育成していくためには、まず学習に対する意欲を喚起しそのことを基盤に据えながら、課題に対する自分なりの考え(予想)を持たせておくことが重要ではないかと思われる。終末のふりかえる場においても、児童自身があらかじめ予想を持っていないと、自分自身の何を修正してよいのか、あるいは、何を深めてよいのか自分自身で自覚していけないと考えられるからである。

参考文献

自ら学ぶ意欲・態度を育成する指導と評価 広島大学附属東雲小学校研究紀要 1989年
自己評価 安彦忠彦著 図書文化社